

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 4 年 6 月 28 日現在

機関番号：23603

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2019～2021

課題番号：19K00325

研究課題名(和文) 中世から近世にかけての放鷹文化における鷹書の体系化を目指す研究

研究課題名(英文) A Study Aiming for the Systemization of Takasho in Falconry Culture of the Middle Ages to the Early Modern Period

研究代表者

二本松 泰子 (Nihonmatsu, Yasuko)

長野県立大学・グローバルマネジメント学部・教授

研究者番号：30449532

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,100,000円

研究成果の概要(和文)：中世以降におけるわが国の放鷹は、狩猟技法という本来の目的を脇に置き、むしろ儀礼として成熟してきたため、幾多の流儀(流派)が生まれ、その展開にともなって膨大な数の説話的伝書、すなわち「鷹書」が成立した。こういった鷹書の研究はこれまで主に日本文学の領域において進められてきたことから、その成果については、諸テキストに見える説話の解釈を中心とする各論的なものが大半を占めていた。本研究では、そういった成果を踏まえつつ、より総論的な視野からのテキスト群(鷹書群)の解明と位置付けを明確にし、それらを体系化してゆくことで新たな放鷹文化の実相にアプローチした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

中世から近世にかけてわが国の放鷹文化の主流を担ったのは武家である。本研究では、そういった当時の武家の間で隆盛した鷹術流派の代表として祢津流と吉田流を取り上げ、それぞれの流派所縁の鷹書に見える叙述内容を網羅的に分析してテキスト群を体系的に整理した。それによって、日本の鷹狩りの歴史における新たな側面を明らかにすることができた。さらには、中世から近世における武家流の鷹書の制作と展開が、わが国の放鷹文化の中核をなす文化的営為であったことを再認識しつつ、わが国における「文化遺産」としての鷹書の総論的な研究を完成することができた。

研究成果の概要(英文)：Whereas falconry in Japan was originally for hunting, since the Middle Ages, it has put aside this purpose and matured into a ritual, and this has given birth to many different schools of falconry. With this development, a vast number of discursive biographies, or so-called "falcon books" have been established. Since such research on falcon books has been mainly conducted in the context of Japanese literature, the majority of the results have been theoretical, focusing on the interpretation of anecdotes that appear in the various texts. In this study, based on these results, we have clarified the elucidation and positioning of the group of texts (falcon book texts) from a more general perspective, and, by systematizing them, we have approached the reality of a new type of falconry culture.

研究分野：中世文学

キーワード：鷹狩り 鷹書 祢津流の鷹術 吉田流の鷹術

1. 研究開始当初の背景

わが国における放鷹の歴史は古く、考古学的な出土品によって6世紀にはすでに鷹狩りがおこなわれていたことが推定されている。しかし、放鷹文化に関する研究はかならずしも積極的に進められてきたとは言えない。戦前に宮内省式部職が編纂した『放鷹』(吉川弘文館、1931年初版、2010年復刻)は本朝および朝鮮における放鷹の歴史、公家や武家に伝来した放鷹の流派、鷹書等を網羅的に解説した大著であり、放鷹文化研究の嚆矢にして集大成と位置付けられてきた。戦後、宮内庁による放鷹の所管が形骸化すると、放鷹文化研究もそれ以上の展開を見出せないまま沈静化を余儀なくされていった。1980年代に入ると日本史(近世史)の分野において、いわゆる鷹場の研究や幕藩体制下における鷹匠制の研究が進展を見せた。しかし、それらは制度史や経済史としての傾向が強く、放鷹そのものを文化事象としてとらえるまでの関心は薄かったように思われる。

そのような中で、わが国の放鷹文化の象徴ともいえるべき「鷹書」の成立と展開が文事的な営み(文化)として認識され、今日的な研究の対象とされるようになったのは、2000年代になってからである。この10数年間の研究の進展は目覚ましく、これまでに多くの鷹書が解き明かされてきた。たとえば堀内勝氏が監修した『鷹の書 諏訪藩に残る『鷹書(大)』の翻刻と注解』(中部大学学術叢書、2008年)は鷹書の本格的な注釈書の嚆矢と言える。また研究代表者(以下、代表者)が公刊した『中世鷹書の文化伝承』(三弥井書店、2011年)は中世に流布した公家流や武家流の鷹書を読み解き、それらの説話伝承について注釈的な視点から論じたものとしてほぼ最初の研究書である。三保忠夫氏の『鷹書の研究 宮内庁書陵部蔵本を中心に』(和泉書院、2016年)は前述の『放鷹』に蒐集された鷹書の書誌データをおよそ85年ぶり更新したものと評価できる。さらに代表者は『鷹書と鷹術流派の系譜』(三弥井書店、2018年)を公刊し、近世諸藩に伝来した鷹書を系譜的に読み解くことによって、中世以来の鷹術諸流の自己認識を構築する媒体として鷹書が制作・展開した経緯の実像を明らかにしてきた。

しかしながら、鷹書をテキストとして注釈的に読み解いてきたこれまでの研究が、その各論的な展開性の限界に直面しつつあることは、それを推し進めてきた代表者自身さえ否めない状況にあった。それぞれのテキストに関する知見を個々に深化させるだけでは鷹書という領域そのものの意義付けとそれらのテキストが表象する文化の全体像を把握することは難しい。いっぽうで鷹書に関する個別のテキスト論はすでに成熟し、総論化へ移行する準備は整いつつあった。そのような状況を踏まえて、本研究では、中世から近世にかけての鷹書という営み(文化事象)そのものの成り立ちを解明する必要性を認識し、とくに鷹狩りの主流を担った武家の鷹書群について、総論的な視座からテキストの連動性を検討してゆくことにした。それによって、わが国における文化遺産としての放鷹文化と鷹書の総合的な研究の進展を目指したものである。

2. 研究の目的

中世以降に成立・流布した鷹書の大半を占めるのは武家社会に伝来した鷹術諸流のテキストであった。代表者はこれまでに諸藩に伝来した鷹術の流派・系譜を解明し、それらのテキストの読解による位置付けに一定の成果を示してきた。そうした成果を踏まえつつ、本研究ではそのような鷹書群について、これまで成し得なかった横断的な検証へと移行することを目指した。鷹書というテキスト群の総論的な解明へと進み、それらを創出・展開した知的営みの背景を明らかにすることで、中世以降の武家社会に培われた放鷹文化の体系化を期したものである。そうした研究成果の公開によって、鷹書という文化的な営みの体系が貴重な文化遺産であること

を広く社会に問い、わが国における放鷹文化の社会的な再発見・再認識まで繋げることを目的とした。

3. 研究の方法

(1) 祢津流の展開と鷹書の制作

中世から近世にかけて武家社会における放鷹文化の中核をなしたのは祢津流である。同流派は、もともと信州・小県郡の小豪族であった祢津氏所縁の鷹術であったが、分家筋の祢津松鷗軒信直が徳川家康に仕えたのを契機に格式の高い鷹術として武家の間で隆盛した。本研究ではそういった松鷗軒系ではなく、祢津氏の本家筋に伝来した鷹書群を中心に調査を進め、両者の相対的な比較検討を通して当該流派の権威が創出された実情について検証する。

(2) 吉田流における鷹書の再創出 1

家康に倣って鷹狩りを愛好した徳川吉宗は、八代将軍に就任する際に紀州藩から吉田流の鷹匠・原田三野右衛門を召し出し、公儀鷹匠として重用した。吉田流はもともと祢津松鷗軒の門弟の一人とされる吉田多右衛門を流祖とするが、吉宗による重用によって祢津流に並ぶ権威と隆盛を得て、全国的に展開してゆく。現存する吉田流の鷹書は享保年間以後に書写されたものが圧倒的に多く、その大半は奥書に原田三野右衛門の名が見える。本研究では、膨大に現存する原田三野右衛門伝来の吉田流の鷹書群に注目し、吉宗が標榜した家康への復古思想およびその政治環境下において、鷹書もまた再創出されてゆく過程を検証・考察する。

(3) 吉田流における鷹書の再創出 2

仙台藩は徳川幕府による放鷹制度の影響を最も強く受けた藩の一つである。同藩でも徳川吉宗の時代以降には藩の鷹匠たちが積極的に吉田流の鷹術を学ぶようになった。その結果、仙台藩では吉田流の鷹書が数多く流布したが、本研究において特に注目したいのは仙台藩伝来の吉田流において『新增鷹鵠方』という朝鮮由来の鷹書が伝授されていた事実である。『新增鷹鵠方』は16世紀に朝鮮漢方の医学者である李焜が執筆した鷹の飼育に携わる薬方書であり、近世初期にはすでにわが国にも伝来している。しかし、同書が広く全国に流布するようになるのは、吉宗の薬草政策の一環として実施された朝鮮薬材調査の対象に同書が取り上げられて以降のことである。それならば、放鷹制度を通して吉宗の施策を積極的に受け入れていた仙台藩の鷹匠たちも、その環境の中で『新增鷹鵠方』を所持するようになったことが推測されよう。さらに所持・伝授にとどまらず、『新增鷹鵠方』の注釈書を制作し、それを吉田流の鷹書に取り入れて独自のテキストを創作するようになる。このような状況を踏まえて、本研究では、近世中期以降の仙台藩における『新增鷹鵠方』の享受と吉田流の鷹書制作が交錯してゆく経緯を検証し、鷹書の再創出をめぐる文事的環境において、朝鮮由来の鷹書が果たした役割を考察する。

以上の(1)～(3)を横断的な各論としつつ、中世以降の武家社会に培われた放鷹文化の体系化を目指す。

4. 研究成果

2019年に発生した新型コロナウイルス感染症(COVID-19)の感染拡大のため、2020年以降は遠隔地や国外での調査は実施できなかったが、代わりに代表者が居住する県内で新たに発見された鷹書や鷹匠文書(信州諸藩に仕えた鷹匠伝来のもの等)の調査が進んだ。それらを比較対象にして検討を進めた結果、上記「3. 研究の方法」で示した祢津流および吉田流の鷹書群の相対的な意義付けとそれらが支えた武家流放鷹文化の多様性が明らかになっただけでなく、予定外に豊富な種類のテキストに関する分析情報が得られたことで、中世・近世における放鷹文化の展開を支えた鷹書群についてより緻密に体系化することが可能となった。以下にその主な

成果について項目に分けて示す。

(1) 諏訪流の鷹書の体系化

近世において諏訪藩の鷹匠を世襲した岡村氏伝来の新出の鷹書群について調査を行った。当該書群は諏訪藩所縁の鷹匠のテキストらしく“諏訪流”を書名に冠するもので、あたかも諏訪信仰を標榜することが窺われる。しかし、その叙述内容は諏訪信仰および諏訪藩とはまったく関係のない流派の鷹書と重なる記事で構成されていた。ただし、そういった他流派のテキストから無作為に寄せ集めた記事のように見えるものの、実は諏訪地域以外で成立したとおぼしき鷹書で、“諏訪流”を冠するテキストと重複する内容を記載している。このことから、「諏訪流」の鷹術は在り地から乖離した位相において構築され、流派所縁とされるテキストは諏訪信仰とは関係なく展開していたことが推測される。そして、そういった諏訪とは無縁の「諏訪流」の鷹書が諏訪藩の鷹匠に逆輸入されて伝来されたのは、当該流派が相応にネームバリューを有していた所以であろう。近世になると諏訪の地元でも「諏訪流」の放鷹文化が形骸化していたことが窺われよう。

(2) 祢津流の鷹書の体系化

先述のように、祢津流の鷹術は、中世末期に祢津松鷗軒が徳川家康に仕えたのを契機として武家の間で隆盛した。しかし、松鷗軒は祢津氏の分家筋に当たる人物であり、一方の本家は、近世において真田家に仕えた松代藩士の祢津氏に該当する。ただし、松代藩士となった祢津氏の一族の中でもさらに分家があり、それぞれに鷹書と鷹匠文書が伝来している。本研究ではそれらの家に伝来した新出の鷹書と鷹匠文書を調査して、各テキストに記載されている内容を分析した。その結果、近世において代々家老クラスの禄高を得た祢津幸直（＝初代松代藩主の真田信之の乳兄弟）の末裔に伝来した鷹書に見える鷹説話は、室町期の五山僧の作とされる画賛に見えるそれと類似している等、必ずしも当家独自の鷹術の特性を示すものではないことが判明した。一方、幸直系祢津氏とは別流の一家に伝来した鷹書と鷹匠文書には、当家が幸直系の祢津氏よりも家格が上であることを主張する鷹術伝承が散見する。このように松代藩内で流布した祢津流の鷹書群の中には家格の高さを誇る家伝書の様相を示すものが含まれていることが明らかになった。その一方で、松鷗軒系の祢津流の鷹術が格式高い礼法であることを主張するテキスト群は、松鷗軒の娘婿の末裔を称する加賀藩に仕えた鷹匠の一族を介して喧伝されたことも確認できた。このことから、同じ祢津流を称する祢津氏所縁の鷹術でも伝来した氏族の伝承や地域の特性の影響を受けて変容してゆく実像が判明した。

(3) 吉田流の鷹書の体系化

先述のように、近世中期に徳川吉宗が将軍に就任する際、紀州藩から吉田流の鷹匠を公儀鷹匠に抜擢したのを契機として、吉田流が武家の間で隆盛するようになった。本研究では、まずは紀州藩に仕えた鷹匠の高城氏伝来の鷹書群について取り上げ、それらに含まれる吉宗以前に成立した吉田流の鷹書群に注目した。そして、それらのテキストと吉宗時代の幕府の放鷹制度の影響を強く受けた仙台藩で流布した吉田流の鷹書と比較検討を試みた。その結果、両者はまったく異質な鷹術伝承が掲載されていることが確認できた。また、同じく仙台藩で成立した吉田流の鷹書の多くに見える『新增鷹鶴方』からの引用文について網羅的に取り上げ、その叙述内容の特徴について分析した。この『新增鷹鶴方』とは、先述したように、吉宗が朝鮮薬材に傾倒した影響によって、国内で爆発的に流行した朝鮮の鷹書である。このことから、吉田流の鷹書には流派特有の一定した伝承や言説が存在するわけではなく、時流に対応する言説を臨機応変に記載する傾向があることを明らかにした。また、吉田流の鷹書に祢津流の言説と称される文言がたびたび引用されるのが、吉田流が祢津松鷗軒の門弟を流祖とする所以というよ

りも、こういった臨機応変にさまざまな言説を引用する当該流派の特徴の一環として位置付けられることも考察した。

以上の(1)~(3)をはじめとして、さまざまな武家流の鷹書についてその実相を明らかにし、それらのテキスト群の特徴を体系的に整理した。その結果、おおむね吉宗が将軍に就任した近世中期を境にして、その前後において武家流の鷹書が大きく変容していることが確認できた。すなわち、吉宗以前に成立・流布した鷹書は格式の高さや氏族のアイデンティティを支える家伝といった“礼法・権威”を主張する媒体で、吉宗以降に成立した鷹書は当時流行した学術や教養を重視した学芸書的な様相を持つものであった。こういった鷹書の変容に伴って、放鷹文化の実像も近世中期を境に変化していったことが想定されるものである。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計13件（うち査読付論文 11件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 二本松泰子	4. 巻 75
2. 論文標題 近代における韓国と日本の放鷹を介した文化交流 - 『高麗古本鷹鶴方』を手掛かりにして	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 日本近代学研究	6. 最初と最後の頁 191 ~ 206
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 二本松 泰子	4. 巻 6
2. 論文標題 【資料】続・松代藩の祢津氏伝来の鷹書	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 グローバルマネジメント = The Global Management of Nagano	6. 最初と最後の頁 54 ~ 62
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.32288/00001367	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 二本松泰子	4. 巻 70
2. 論文標題 日本における朝鮮放鷹文化の享受と展開 - 『新增鷹鶴方』の伝播をめぐって	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 伝承文学研究	6. 最初と最後の頁 51 ~ 64
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 二本松 泰子	4. 巻 5
2. 論文標題 【資料】国立公文書館内閣文庫蔵『新增鷹鶴方』（函号三〇六 三〇七）全文紹介	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 グローバルマネジメント = The Global Management of Nagano	6. 最初と最後の頁 78 ~ 88
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.32288/00001360	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 二本松 泰子	4. 巻 4
2. 論文標題 近世期における諸藩の放鷹文化 尾張藩の鷹匠・林氏と当家伝来の鷹書の紹介	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 グローバルマネジメント = The Global Management of Nagano	6. 最初と最後の頁 1~15
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.32288/00001340	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 二本松泰子	4. 巻 71
2. 論文標題 韓国国立中央図書館所蔵『鷹鵠方』(貴159 古朝68-41(朝68-41))全文紹介 - 前近代・近代における朝鮮と日本の放鷹文化交流	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 日本近代学研究	6. 最初と最後の頁 167-179
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 二本松泰子	4. 巻 669
2. 論文標題 吉田流の鷹術伝承 : 仙台藩の事例を手掛かりにして	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 立命館文学	6. 最初と最後の頁 109-121
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 二本松 泰子	4. 巻 3
2. 論文標題 吉田流の鷹書と鷹術流派 紀州藩の事例を手掛かりにして	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 グローバルマネジメント = The Global Management of Nagano	6. 最初と最後の頁 1~20
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.32288/00001306	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 二本松泰子	4. 巻 14
2. 論文標題 松代藩・光直系祿津氏の系譜における鷹の言説	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 間谷論集	6. 最初と最後の頁 216～193
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 二本松 泰子	4. 巻 2
2. 論文標題 信州諸藩の鷹狩り 松代藩の祿津氏の鷹書	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 グローバルマネジメント = The Global Management of Nagano	6. 最初と最後の頁 35～55
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.32288/00001281	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 二本松泰子	4. 巻 71（9）
2. 論文標題 鷹匠と鷹書制作（下） 諏訪藩の鷹匠伝来の新出資料を手掛かりに	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 信濃[第3次]	6. 最初と最後の頁 1-22
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 二本松泰子	4. 巻 71（8）
2. 論文標題 鷹匠と鷹書制作（上） 諏訪藩の鷹匠伝来の新出資料を手掛かりに	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 信濃[第3次]	6. 最初と最後の頁 1-25
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 二本松 泰子	4. 巻 1
2. 論文標題 諏訪藩の鷹匠に伝来した鷹書（新出資料）について 鷹和歌の記載を中心に	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 グローバルマネジメント = The Global Management of Nagano	6. 最初と最後の頁 41～61
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.32288/00001266	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 1件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 二本松 泰子
2. 発表標題 祢津流の鷹書と吉田流の鷹書に見える療治法
3. 学会等名 第91回日本獣医史学会研究発表会（招待講演）
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 （福田晃・中前正志編）牧野和夫、佐藤愛弓、原田信之、児島啓祐、福田晃、小助川元太、二本松泰子、山本淳、高橋秀城、大島由紀夫	4. 発行年 2019年
2. 出版社 三弥井書店	5. 総ページ数 295
3. 書名 唱導文学研究 第十二集	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
---------	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------